

# 日本霊長類学の黎明期に関する資料 —国立民族学博物館の民族学研究アーカイブズから—

小長谷有紀

国立民族学博物館、日本

国立民族学博物館に所蔵されている資料の中から、霊長類学の祖である今西錦司に関連する資料についてその概要を紹介する。とりわけ今西が初めてサルと出会った都井岬やウマに注目した内モンゴルの資料についてコメントを加える。これらは、日本における霊長類学の黎明期について研究する上で貴重な資料となるであろう。

キーワード：今西錦司、都井岬、モンゴル

## 1. はじめに

日本における霊長類学の祖が今西錦司であることは論を俟たない。京都大学人類進化論研究室のHPにも記されているように、日本における斯学の始まりは、1948年、今西錦司が当時学生であった伊谷純一郎と川村俊蔵とともに宮崎県幸島で初めて野生ニホンザルの調査を行ったことにある。ただし、この幸島に先立って、最初のサルとの出会いは都井岬であること、また、都井岬に行く目的はウマの調査にあったこと、さらに、そもそもウマへの関心は日中戦争中に現在の中国で行われたモンゴル調査にあったこともすでに知られている（松沢 2009 など）。したがって、今西錦司によるモンゴルおよび都井岬のフィールドワークを、日本における霊長類学の黎明期（以下、単に黎明期とする）の研究として位置づけることについては、おそらく大方の同意を得られるだろう。

本稿の目的は、国立民族学博物館（以下、みんなばくと称す）に所蔵されている資料から、同黎明期における今西錦司に関わる資料を紹介し、今後の詳細なアーカイブズ研究を誘うことにある。

みんなばくには民族学を推進した研究者たちの調査記録等がまとめて「民族学研究アーカイブズ」として保管され、整理されている。それらのうち、初代館長梅棹忠夫に関する資料を本稿では「梅棹アーカイブズ」と称す。

筆者は梅棹の没後、2010年から同アーカイブズを整理し始め、翌2011年に展示（国立民族学

博物館特別展「ウメサオタダオ展」2011年3月10日から6月14日、日本科学未来館企画展「ウメサオタダオ展」2011年12月21日から2012年2月20日）を担当した。同アーカイブズにある資料をふんだんに用いて展示図録を制作するとともに（小長谷 2011）、モンゴル関係についてはさらにその後も整理を進め、スケッチ原画集（小長谷 2013）およびローマ字カード集（小長谷 2014a）を公刊した。ローマ字カードとは、タイプライターによるローマ字書きで、フィールドノートから調査内容を項目別にA6判自家製カードに転記したものである。約5000枚に及ぶローマ字カードを一般的な漢字かな混じり文にして資料集として刊行し、当該資料を用いる研究（ナランゲレル 2015）を促した。

こうした資料整理のプロセス全体について一冊の書にまとめるなかで（小長谷 2017）、今西錦司にはしばしば言及することになったものの、今西錦司に関する資料（以下、今西関連資料と称する）としてまとめて紹介したわけではなかった。そこで、本稿では今西関連資料の概要を紹介し、黎明期とりわけモンゴル調査記録と都井岬からの通信資料については章を分けてやや詳しく解説する。

## 2. 梅棹アーカイブズにおける今西関連資料の概要

すべての資料のうち、これまで整理された資料のまとめりごとに、年代順に示す。

### 2-1. 西北研究所モンゴル調査 1944-45

1944年、当時の傀儡政権であった蒙古聯合自治政府の首都、張家口に西北研究所が設立された。所長に任命された今西錦司は、ここを起点に現在の中国内蒙古自治区シリング盟を調査した（斎藤 2013）。このモンゴル調査資料の中心をなすのはフィールドノートである。これらは、梅棹によってナンバリングされ、調査隊全体の資料として整理されていることに特徴がある（小長谷 2014b）。全部で45冊残っているうちの11冊が今西錦司のノートである。これらは全てみんぱくホームページで公開されている<sup>(注1)</sup>。

同行した和崎洋一による写真が約100枚残されており、後述するように今西が写っているものも

10余枚ある。この写真資料は一般公開されていないが、みんぱくで閲覧、利用することができる。

### 2-2. 屋久島調査 1949

戦後、日本に帰国してから、今西グループによるフィールドワークはしばらく国内に限られた。1947年の奈良県磯城郡平野村の農村調査に続いて、1949年には京都府山岳連盟屋久島踏査隊が結成され、屋久島調査が行われた。みんぱくに保管されている梅棹アーカイブズのうち「屋久島」というファイルの中に、今西錦司から梅棹忠夫に宛てたハガキ4通（写真1a, 1b, 2a, 2b, 3a, 3b, 4a, 4b）と電報1通（写真5）がある。



X0284900



X0284905



X0284906



X0284908



X0284916



X0284933



X0284944



X0284958



X0284977



X0284981

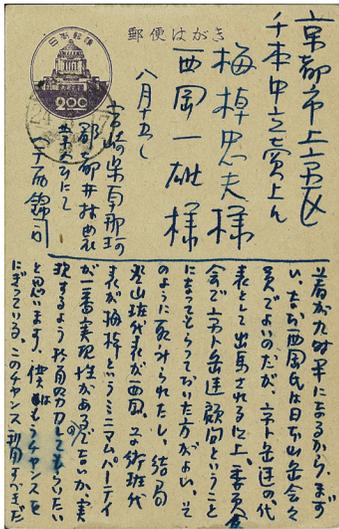


X0284985

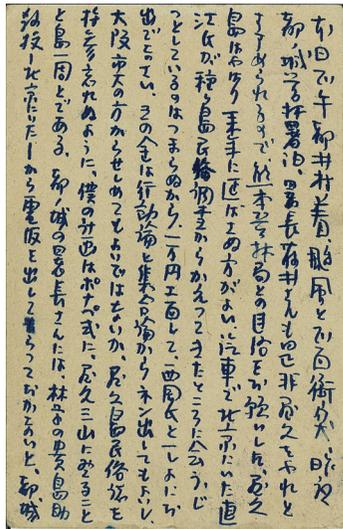


X0284988

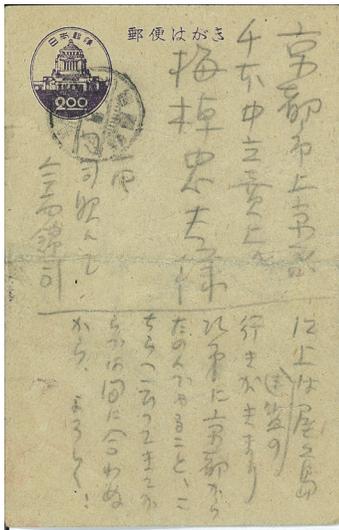




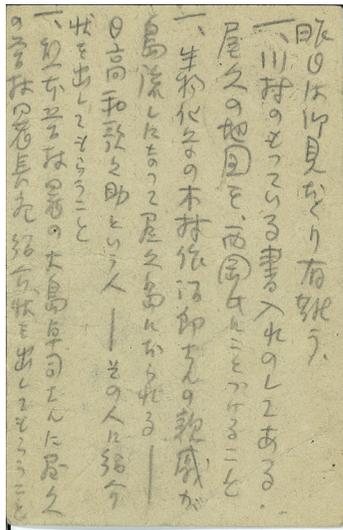
2a



2b



1a



1b

2-3. サル（霊長類グループ）というファイル  
 梅棹の整理方法の一つに「一件ファイル」というシステムがある（梅棹 1969）。要件ごとに関連資料をマチ付きフォルダーに入れるのである。「サル」という名のフォルダーには「霊長類グループ」というタイトルも重ね書きされている。そこには、以下のような資料がある。

『宮崎県幸島猿の生態調査計画』というガリ版刷り。計画立案者として京都大学理学部講師理学博士 今西錦司の名前が書かれた鏡面を含めて6

枚からなる。第一次調査（1950年5月）について、調査人員3名、10日間、5万円を計上している。同計画書の手書き草案もある。

また、ローマ字で書かれた資料として、1951年7月17日の日付で「エピローグ：今西」とあり、「ヤーキーズの一代記」という書き出しで始まっている。R. M. Yerkesの生涯を学史に代える試みであると思われる。幸島調査報告書のあとがき構想を今西が語り、梅棹がメモしたものであろうか。そのほか研究会のメモと思われるものがすべて

ローマ字で書かれている。これら一連のローマ字書き資料は、梅棹が一時的に霊長類研究会に参加していたことをうかがわせる。

これらの資料が京都大学（理学部や人文科学研究所）に残っていなければ、貴重な資料と言えよう。

#### 2-4. 京都大学アフリカ学術調査隊（類人猿学術調査を含む）1961-67

写真については別途、みんなくのデータベースとして整理公開されている<sup>(注2)</sup>。また、図書室には、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊の「アフリカ通信」（ガリ版刷り）が1号から5号が所蔵されている。毎報の末尾に（今西記）と記されている。

昭和38年5月14日付の手紙は、計画を相談する会合の通知であり、それに対して梅棹は欠席の断り状を出している。同計画はその後、Kuaraと称されていたようである。1966年3月14日付のメモには「梅棹様 本日 Kuara 例会後 赤垣亭にお集り下さい Kuara 今年度の事業計画について御相談願います」とある。そのほか、タイプされた公的文書として、例えば、大阪市大理学部長あてに、梅棹忠夫の参加許可を求める依頼書（1963.3.25）。学長および所長との連名で、これまでの調査の報告を提供するとともに、支援を求めて官公庁や財界へ宛てた手紙（1963.3.1）などがある。

#### 2-5. 「今西錦司」というファイル

「今西錦司」と書かれたフォルダーに入っているのは、もっぱら抜き刷りで、今西のサインが認められるにとどまる。

今後、さらに精査が進めば、多様な「一件ファイル」のフォルダーに入れられた、各種のメモや書類のなかに、今西の痕跡が確認されるかもしれない。

### 3. 石毛アーカイブズにおける今西資料の概要

みんなくの第3代館長の石毛直道は、書籍や写真の多くを味の素食の文化センターに寄贈した。ただし、一部のフィールドワーク資料が未整理のまま、梅棹資料室に預けられている状態である。その中に今西関連資料が見受けられる。

#### 3-1. モンゴル調査 1938年

コムギの祖先の発見者として知られる木原均を隊長とする京都帝国大学内蒙古学術調査隊に関連する写真208枚が残されている。木原均編『内蒙古の生物学的調査』の凡例に、「図版60及63のみは昭和14年夏今西と共に入蒙された森下正明氏から拝借した」とあり、図版60と同じ写真ならびに図版63とほぼ同じ写真を含むため、森下正明による写真群と思われる。各写真の裏面にはナンバリングと地名、人名などのコメントが付されている。今西が比較的明瞭に写っている写真として以下の7枚がある。

9-11 および 12 「最初のテント」

21-02 および 03 「オンゴン」

23-8 および 9 「正白旗小学校」

24-7 「アラシャン廟にて」

上記および注2で紹介したみんなくのデータベース「京都大学学術調査写真コレクション」に統合されるべき資料群であると思われる。

#### 3-2. ボナベ島調査 1941年

京都大学探検地理学会によるボナベ調査の時のフィールドノートがまとまって残っている。スケッチを描いた雑記帳などは梅棹忠夫のものではないかと思われる。

#### 3-3. ウマと人の写真 1948年?

ウマと人の写真が15枚残されており、都井岬で撮影されたものであるかもしれない。

#### 3-4. 京都大学人文学研究所における研究会記録 1959年

今西錦司は1950年から人文研に勤め、1957年から「霊長類におけるカルチュアとパーソナリティ」という共同研究会を主宰する一方、1959年には社会人類学部門が設置され（京都大学2010）、「人類社会生態学研究会」という共同研究を始めたようである。同会の記録が青焼き（ジアゾ式複写）で残っている。参加者として、今西を筆頭に、上山春平、藤岡喜愛、加藤秀俊（留学中の一時帰国参加か?）、飯島、伊谷純一郎、谷泰、和崎洋一、川喜田二郎、梅棹忠夫が確認できる。

#### 4. モンゴルでのフィールドワークについて

黎明期の今西関連資料として、最もまとまっているのは、上述の西北研究所時代のモンゴル調査におけるフィールドノート11冊である。梅棹による整理番号では、36番から46番までである。行程は以下の通り（地名表記は今西記載ママ）<sup>(注3)</sup>。

36番（今西 no.1）1944年9月6日張家口から10月9日ヌクセンゴルまで。

37番（今西 no.2）1944年10月9日から東スニト旗公署での滞在を経て10月31日オランシャントまで。

38番（今西 no.3）1944年11月1日サインホープルから11月10日西ザリンまで。

39番（今西 no.4）1944年11月11日西ザランから11月26日コクトルガイまで。

40番（今西 no.5）1944年11月27日コクトルゴイから12月17日ザレンスームまで。

41番（今西 no.6）1944年12月20日ジャブチルから1945年1月16日アトチンまで。

42番（今西 no.7）1945年1月16日から1月26日チェリタイスームまで。

43番（今西 no.8）1945年1月27日ゴルブンホトックから2月2日ハナハダスームまで。

44番（今西 no.9）1945年2月3日正白旗公署から廂白旗公署を経て2月17日バインドロンスームのサイン（通訳）宅まで。

45番（今西 no.10）1945年2月18日から2月26日張家口到着まで。

46番（今西 no.11）1944年7月。

ちなみに、上述40番ノートの77ページには、12月11日の日付で遊牧移動について本格的に論述が始まっており、41番ノートの48ページには、1月5日「遊牧論」脱稿とある。カタカナ混じりの今西自筆の文章を書き起こしたうえで、分析するには時間を要するだろう。詳細な解説を試みる有志の出現を今後に期したい。

なお、梅棹がフィールドノートの内容をローマ字書きでカードに整理する際には、一部の今西ノート（39、40、41番の3冊）を用いている。カード化に用いていない今西ノートについても、世帯番号の朱筆が入れられており、共に整理されている。

今西のモンゴルでの様子が比較的はっきりとわ

かる写真は12枚ある。整理番号順に以下、内容を示そう。ただし、撮影順は不明である。

X0284900 杖を持って草原に座る今西錦司。左はモンゴル語を通訳したバト少年であろうか。

X0284905 オボーと呼ばれる土地神の依代の前でモンゴル人を相手に訓話でもしているのであろうか。当時の蒙古聯合自治政府の旗がたなびいている。

X0284906 ゲルの中のスタッフたち。後列左から、加藤泰安、今西錦司、酒井行雄、梅棹忠夫、前列は中尾佐助。

X0284908 今西と梅棹との2人が屋外で地図を見ながら話し合っている。

X0284916 西北研究所宿舎での楽しそうな食事風景。柱に寄りかかっているのは藤枝晃。

X0284933 仕留めたオオハクチョウを持つ今西錦司。

X0284944 民家前での整列。左から、今西、梅棹、加藤、中尾、酒井。

X0284958 民家前での整列。中央は東スニト旗の貝爾（ベイレ）のホルジョルジャブ（当時、蒙疆政権牧業総局長）。

X0284977 仕留めたモウコガゼル（黄羊）と。

X0284981 草原キャンプで読書する今西。

X0284985 調査隊一行。今西は中央に座り、梅棹は馬上で日の丸を持つ。

X0284988 草原キャンプ。今西の左は加藤。

フィールドノートを読むことによって、これらの先後関係や場所、モンゴル人について判明するにちがいない。

#### 5. 都井岬からの通信資料について

上述のように、「屋久島」のファイルの中に、都井岬からのハガキ4通と電報1通がある。

1通目は昭和24（1949）年8月14日、門司から。屋久島調査に関する段取りを梅棹に指示する内容である。全文は以下の通り（写真1a, 1b）。

「昨日は御見おくり有難う。一、川村の持っている書入れのしてある屋久の地図を、西岡氏にことづけること 一、生物化学の木村作次郎さんの親戚が島流しになって屋久島におられる一日高和歌之助という人—その人に紹介状を出してもらうこと 1、熊本営林署の大島卓司さんに屋久の営林署長宛紹介状を出してもらうこと 以上は連盟の

屋久島行きがきまり次第に京都からたのんでやること、こちらへ云ってきてからでは間に合わぬから、よろしく」

この「西岡氏」とは、後述にあるように、屋久島調査の際、山岳班を担当するアルピニストの西岡一雄である。

2通目は翌15日、都井村から。梅棹の住所ながら、西岡一雄へも連名で出されている（写真2a）。地元からも屋久島調査をするように勧められているし、「じっとしているのはつまらぬから、1万円工面して、西岡氏と一しよにお出でなさい」とある（写真2b）。お金の工面の具体的な方法、持参すべき書籍、関係者への事前の連絡など屋久島調査についてさらなる指令が出されている。また、調査主体であった京都府山岳連盟に関連して次のような記載がある。

「なお西岡氏は日本山岳会会員でよいのだが、京都岳連の代表として出馬される以上、委員会で京都岳連顧問ということになってもらっておいた方がよい。そのように試みられたし。結局、登山班代表が西岡、学術班代表が梅棹というミニマムパーティが一番実現性があるのでないか、実現するようとにかく努力してもらいたいと思います。僕はもうチャンスにぎっている。このチャンス利用すべきだ」。

3通目は翌16日、台風のための足留めが続くので前便の補足とのこと（写真3a, 3b）。まだ到着したばかりでここでの調査が始まってないにも関わらず、どこでいつ落ち合うかについての二択が提示されている。

4通目は、9日後の8月25日。全文は以下の通り（写真4a, 4b）。

「ココハ不便ナトコロデローモ片便リニナツテオモシロクナイ。コノ前知ラセタヨウニ、集合論（梅棹）ト行動論（今西・梅棹両名ノ分）トヲ併セテラ、1万円ハデキルダロウ。ソレヲ君ノ屋久島ニ充当スルベキダト思フ。僕ノ方ハ、鹿児島へ出タトキ7千円グライ確保デキルヨウ、予算ヲタテテイル。field work ハドーシテモアル限度デ継続シテオイタ方ガヨイ。ウマハ来年4月ニモウ1度ヤリタイガ、ソノ費用ハドコカラカ捻出スルツモリダ。宮崎へユクノハサル島ノサルヲヤルタメニ縣を動かソウトイウ考エデアル。シカシ川村ハ奈良ヲヤツテイルシ、伊谷ハストライキノ闘争委員ナ

ンカヤツテイテ、後継者難デアル。ナントカシナケレバナラス。毎日スコールガキテ、スズシイ。ギッディングスノ社会学原理ヲ讀ンデイル。」

「片便り」というのは今西が書いてばかりでまだ返事がこない状態を指しているのだろう。フィールドワークを継続するよう梅棹に勧めて、その予算確保について具体的に提案している。それにしても、なんたるプロデューサーぶりだろうか。屋久島、ウマ、サルとの3つの調査研究を同時に運営しようとしている。資金のことばかりでなく、地元を協力を仰ぐ交渉も自らおこなっていたようだ。若手研究者の育成にも意を注いでいる。そして、最後に、今読んでいる洋書（ギッディングの『社会学原理』）を知らせて、さりげなく梅棹に情報を発信しているように思われる。

電報は31日付で、鹿児島で待つと梅棹に宛てて打たれた（写真5）。

これら一連の通信を見れば、今西のマネジメント能力とともに、梅棹への配慮と信頼もまた同時にうかがわれよう。

## 6. さいごに

都井岬以前、1944年から45年にかけてのモンゴル調査において、残されたフィールドノートを見る限り、今西は、存外、社会関係に注目していた。世帯の経営などについても記している。上述のローマ字カード集をダウンロードし、デジタルで検索すると、39番から41番までの今西のフィールドノート3冊からは、「家畜の分布」「屠殺」「雪害」「オオカミ」「井戸」「大風」「雪」「雇い女」「寺への家畜あずけ」「羊毛の集荷」など様々な項目に寄与していることがわかる。

ウマについて何を見てどう感じていたかなども、どこかに見出しうるかも知れない。いずれにせよ、筆まめであり、繊細に観察して徹底的に記述する習慣が確立されていたことは疑いない。そしてそれがやがて、個体識別による観察方法として展開し、日本人研究者の霊長類学にもたらした功績として海外から評価されていくのだろう（松沢2009）。斯学史研深奥部とも言うべき今西フィールドノートは探検されるのを待っている。

## 謝辞

本稿の執筆にあたっては、みんぱくの梅棹資料

室のスタッフである横須賀史子さん、元秘書でもある明星恭子さん、三原喜久子さんにご尽力いただいたことを記して感謝する次第である。また、資料については国立民族学博物館の掲載許可を得ている。

## 注

- 注1 みんなく HP の「共同利用」のメニューから「データベース」を選択すると、「民族学研究アーカイブズ」のメニューが並んでおり、その中から、「梅棹忠夫」をクリックすると、概要紹介画面に至るので、その左上にある「全リスト」を選択し、全メニューから「フィールド・ノート」をクリックすると、資料番号 19 以降が「内モンゴル調査」であり、その後半の 36 冊目から 46 冊目までが今西錦司のノートである。[http://nmearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/main.html?tableId=11\\_Field\\_note](http://nmearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/main.html?tableId=11_Field_note)
- 注2 みんなく HP の「共同利用」のメニューから「データベース」を選択し、「映像音響資料」のリストから「京都大学学術調査隊写真資料コレクション」を選択すると、アフリカ関係の写真を選択して今西錦司の写っている写真 108 枚を一覧することができる。<http://htq.minpaku.ac.jp/pkuse/>
- 注3 1944 年から 45 年にかけての現地調査の旅程については、小長谷 2014a の付属資料にあり、ダウンロードすることができる。[https://minpaku.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_snippet&index\\_id=103&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese&page\\_id=13&block\\_id=21](https://minpaku.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=103&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese&page_id=13&block_id=21)

## 引用文献

- 木原均  
1940 『内蒙古の生物学的調査』 養賢堂
- 斎藤清明  
2013 「フィールド科学をかんがえる：西北研究所を原点にして」『ヒマラヤ学誌』 14:130-139
- 梅棹忠夫  
1969 『知的生産の技術』 岩波書店
- Tetsuro Matsuzawa, William C. McGrew  
2008 'Kinji Imanishi and 60 years of Japanese Primatology', *Current Biology* 18(14):587-591.
- 松沢哲郎  
2009 「霊長類学 60 年と今西錦司：世界の霊長類学における日本の貢献」『霊長類研究』

24:187-196.

京都大学人文科学研究所

2010 『人類学の誘惑 京都大学人文科学研究所 社会人類学部門の五〇年』

小長谷有紀

2011 『梅棹忠夫－知的先覚者の軌跡』 千里文化財団

2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』 国立民族学博物館（調査報告 111）

2014a 『梅棹忠夫のモンゴル調査：ローマ字カード集』 国立民族学博物館（調査報告 122）

2014b 「梅棹忠夫のモンゴル調査の記録と整理－フィールドノートからローマ字カードへ－」『日本とはなにか－日本民族学の二〇世紀』 東京出版、271-288 頁。

2017 『ウメサオタダオが語る梅棹忠夫』 ミネルヴァ書房

ナランゲレル

2015 『梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』 国立民族学博物館（調査報告 130）

## Summary

### **Materials about the Dawn of the Primatology in Japan: Stored in the Archives of National Museum of Ethnology**

Yuki Konagaya

National Museum of Ethnology, Japan

In this paper I introduce the primary sources about Kinji Imanishi who is the founder of primatology in Japan. These materials have been kept in the National Museum of Ethnology, Osaka. Especially I would like to give comments on the letters from Toi Cape where Imanishi first met monkeys and Inner Mongolia where he observed horses. These materials are valuable for archive research on the dawn of Japanese primatology.